

咲間進さんの戦争体験

～入隊から復員までのお話のまとめ～

●収録日:平成29年12月2日 収録場所:北海道

●制作者:戦場体験放映保存の会

会事務局:〒114-0023 東京都北区滝野川6-82-2

TEL:03-3916-2664 (火・木・土・日 10時～17時)

◎咲間進さん（99）※収録当時



□プロフィール

●大正7年生まれ

●収録日：平成29年12月2日

●所属部隊：野戦瓦斯（ガス）第13中隊

要2232部隊

北部第30111部隊（札幌地区第七特設警備隊）

●戦地：華中（武漢、信陽、宜昌作戦など）

樺太（上敷香）～北海道（虻田町）

□体験のまとめ

○1918(大正7)年1月15日、北海道生まれ

- ・現在の伊達市関内で生まれ育つ。
- ・6人兄弟の次男。
- ・私で開拓当時から4代目。咲間家はもともと伊達藩のルーツになる柴田藩の藩主の家来だった。一番はじめに北海道へ渡ったのは明治3年。伊達の船岡町では柴田会という会が今でも継続されている。
- ・軍隊に行くまでは農業の手伝いをしていた。

○1938(昭和13)年、徴兵検査を受ける。

- ・当時は満州事変からつながって日支事変と中国を相手に戦争をやっていたので大半が合格にさせられた。
- ・身体はそんなにいいほうではなかった。真ん中ぐらいだった。僕たちの徴兵検査、昭和13年あたりはね、もう戦争はじまってたからね、内臓に異常がなければね、大半の人は合格したからね。

○1939(昭和14)年7月1日、旭川の輜重兵第7連隊留守隊第1中隊に現役入営。

- ・旭川の留守隊では毎週のように初年兵の所持品検査があった。そういう時には悪い先輩兵がいたずらで誰かの物を隠してしまう。あとで出てくるんだけど、検査の時になかったら困るから、誰かのものをつまみかきつけて自分のものにしてた。初年兵のものは1から何百っていう番号で指定されているからすぐわかる。検査する方は自分の中隊の初年兵だから、これは誰かのやつを盗んできて削って書き直したということはわかるんだけど、別にあんまり責めようとはしない。
- ・初年兵教育の時に営内靴を盗られてしまったことがあった。困ったので朝早く起きてトイレに行って、大便のほうの戸の閉まっているところに脱いだ営内靴を盗った。「小笠原」という古参兵の名前が書いてあったが、古参兵の物をとれば初年兵を困らせることがないからと思ってとってきた。
- ・それから演習に出るので、どうやって名前を書き変えたらいいかなあと困っていると、黒田という上等兵が俺の行動を見抜いていたらしいんだよねえ、「咲間は午後の訓練

休んでもいいから、俺の私物棚を綺麗に整頓しといてくれ」という指示をあたえて演習に出ていった。私物の棚をみたらちゃんと角ばったように綺麗になっている。あれは後で考えたら、このことを見抜いていて、書き直させるためだなあと考えた。

・そして晩に小笠原という上等兵のいる班に、班の部屋の者が一名ずつ呼ばれて、いよいよ俺の番が来たら、「咲間、お前これ支給されたものか？」と言われて、「そうです」、「絶対間違いないか?」、「はい、間違いありません」、そして「よし!」っていわれて出た。

・そして消灯になったら、「おいおい」つつつ古参兵がいるのね。そうするとね、「俺、小笠原だよ、ちょっと話あるから廊下へ出ろ」。したらね、いろいろ話すうちにね、「俺ね、青年団の時にね、洞爺温泉のね、“とっこたん”というグラウンドでね、一万メートルの選手で優勝した小笠原えいいちだよ」っていわれてね、「ああ、記憶あります」と言ったらね、「お前は俺の営内靴盗んだべ」っていわれて、「軍隊はね、盗まれた方が悪いんだから、俺は叱りはしないから、お前要領いいよ。古い兵隊を困らせてもね、同年兵は困らせたくないという気持ちでやったんだろう」というから、「そうです」と言ったら、「俺も初年兵の時はそういうことやったよ」と言われた。

○3週間の訓練が終わって、「特業瓦斯兵を命じる」と19人が言い渡された。

・人選は本部のほうで勝手にやる。「前の人の教育が終わった、次の特業」というわけです。特業を命ぜられる。その中の毒ガスだった。「毒ガス兵」とは言わないで「瓦斯兵」と言った。

・ものすごく厳しい教官で、「毒ガス兵に仕上げるために教官に任命されたんだから、正しいことをやる」。そして「実際に毒薬の実物を使った体験をやる」といって、最初から催涙ガスとか、くしゃみガスとかってね、最終的にはねイペリットルイサイトというね、体内に入ったら一生抜けられないような毒で後遺症の残る実験をさせられた。「いいんですか?」と聞いたら、「戦地行ったらね、お前のあれを説明するんだ。お前の体はね、もう自分でも親兄弟の物でもないんだ。日本帝国と天皇陛下にまかせた体なんだから、自分はお前達を一人前の毒ガス兵として立派になるよう教育する任務を与えられてるんだ」と言われた。厳しい教育だった。

・イペリットやルイサイトで実験をする時に、「そういうものね、いつか害がみえてくる時があるのは常識でないか」と言ったら、「何を言うんだ」と叱られた。

・原液を足の脛に付けられた。その後遺症で今でもやっぱりちくちく痛い。毎晩薬塗ってね、それでごまかして眠ってるけど。

・戦後、戦友会でこの時に教育を受けた同年兵に会うと、よく「痛いよ」と言い合った。

・戦友会で集まる人もだんだん亡くなって、減ってくるので、一度政府の方へ連名で補償を求めようという話が出たこともあったが、軍人勅諭に「我が国の軍隊はね、そもそも

天皇の統率のもとにある」という勅諭があるからね、そうずっと補償をしてくれということを出せば昭和天皇に迷惑が及ぶんでないかという考え方で、「辞めてしまおう、いままで諦めたんだから諦めよう」ということになった。【※医学的に証明することが難しいそうです】

・3週間のガス兵の教育を受けたのちに、歩兵の27連隊に転属させられて、27連隊から中国の漢口に本部を置いた野戦瓦斯第13中隊に補充要員として行った。

○1939(昭和14)年8月20日、陸支機密第117号により野戦瓦斯第13中隊要員として歩兵第27聯隊留守隊に転属を命ず。

○1939(昭和14)年9月10日、転属のため旭川出発。

○1939(昭和14)年9月14日、宇品港出発。

・その時には私たち輜重兵19名は数がはっきりしているけれども、歩兵さんも30何名ぐらい一緒に行った。だけど引率の教官の目が鋭くて、ちょっと人数を数えようとしたら「お前何を数えてるんだ」と叱られてしまい、なかなかはっきりした人数がわからなかった。そういう厳重な監視のもとに教育された。

○1939(昭和14)年9月28日、漢口上陸。同日漢口に於いて中隊に編入。



※昭和14年10月13日、漢口での内務班員(武田平八郎さんのアルバムから)



※同上。当時の咲間進さん

○1939(昭和14)年9月29～10月31日、漢口警備。

・(※漢口に到着した際に残飯を貰いに来た中国人の子供や大人を目撃)それはね、かわいそうだと思ったよね。土と混ざってしまったやつをね、ざるにいれててね、「どうするんだべ？」って聞いたら古参兵がね、「あれを水で洗ってね、食べれるものと、食べられないものにね、区分してね、そうしておかゆにしたりなんかしてね、加工して食べてるんだ」って。だから「戦争なんて嫌なもんだよ」って古参兵が言ってたもん。

○1939(昭和14)年9月28日、第11軍野戦瓦斯第12中隊に編入。

○1939(昭和14)年10月1日、中支那派遣軍第2野戦瓦斯第13中隊に編入。

【※第11軍が10月1日に発令した「呂集作命第四百六十八號」には、「五、野戦瓦斯第13中隊(乙)と野戦瓦斯第八小隊は第二野戦瓦斯隊の編成に入るべし」とある】

○1939(昭和14)年11月1日、漢口出発武昌着。

- ・野戦瓦斯第13中隊は武漢大学(※武昌区に現存)の生徒宿舎を兵舎にしていた。そこから第一線と言われていた。
- ・この13中隊の補充要員は僕たちが最終だった。
- ・僕たちが行った時に二代目の坂東重蔵という部隊長が戦死して、上野要治という人が三代目の部隊長になったんだけどね、「命はね、僕も君たちもね、一個きりないんだからね、上手に使いなさい。戦死するばかりが忠君愛国でないんだからなあ」と言う変わった部隊長だった。みんなも「いやあこんどの部隊長変わってるよなあ、あんなこと言って非国民だって言う将校出てこないのかあ」なんて陰で言っていた。
- ・隊長の階級は中尉。年齢は20代か30はじめぐらい。
- ・部隊にはお坊さんもいるし石屋さんもいたので、漢口の一角に「坂東重蔵の墓」を建てて葬ったが、戦後どうなったかはわからない。
- ・中隊には約800名いた。
- ・戦時中でも一個中隊は200人程度だったんだけどね、それを800名にしたということとはね、「敵の目を欺くためだった」ということを、戦後戦友会で先輩たち調査した結果わかったと言っていた。「13」という数字も中国人の一番嫌がる数字だったという。
- ・最初は飯田という小隊にいて、次は木村米次郎という准尉の小隊にいた。木村准尉とはのちに偶然予備役召集で樺太の上敷香の部隊に行った時も一緒だった。
- ・13中隊の本部付の輜重隊だと聞いた。歩兵や輜重兵などの混成部隊だった。
- ・このころは19人が3つぐらいの部屋にわかれて寝起きしてたはず。教育が終わってから本部のほうで、「誰それ誰それは一小隊の何班、2小隊の何班」というふうに配置された。
- ・武田君(※戦友)は小さい字を書くのが上手だったらしい。それでねえ、軍隊手帳の記入などね、手伝ってたはずだ。なんていえばいい、愉快的な一人にえらばれてたなあ、酒だったあんまり大酒飲まなかったしね。
- ・札幌からきた前田一郎と言う人は、骨と皮みたいに痩せてた若い人だけど大食で、「食事あまったらくれな、くれな」、なんて何人にも頼んでおいて食べる人だった。だけどあの人はあんなに食べてなんで痩せてるんだねと思った。
- ・いや戦地では米を手に入れてね、米だけのご飯食べるなんてめったにないからねたくさん食べるんだよ。
- ・中国を北支那、中支那、南支那と3つにわけて、そのひとつひとつに司令部があって司令官もいた。私達が行った当時の最初の部隊の司令官は森田豊秋という司令官【※第二野戦瓦斯隊の隊長か?】でね、その次が岡村寧次【※当時第十一軍司令官、のち支那派遣軍総司令官】。



↑ 武漢大学(武田平八郎さんのアルバムから)

○1939(和14)年11月2日～1940(昭和15)年4月15日、武漢大学付近の警備及び戦闘。

- ・小さい討伐には何回も出ていた。そんな討伐戦は軍隊手帳にも載ってないと思う。何週間かぐらいで帰って来るからね。
- ・討伐戦は「今回は何小隊が行く」というふうに、中隊本部のほうから指名された。
- ・討伐が終わって帰れると思ってたらね、司令部の方から「どこそこの戦闘に応援してやってくれ」と指示が出て、留守隊に帰らないで途中からそっこのほうに応援に行くことが多かった。
- ・はじめて毒ガスを使った時にむこう【※中国】の兵隊だけじゃなく一般住民でも亡くなる、死者が出るんだよね。だから戦争なんて嫌なもんだなあとと思ったよね。
- ・毒ガスは目に見えない。黒い黒煙に混ぜて焚いた。
- ・煙と風を利用した。
- ・もし風が反対方向に向いてきた時のために、ちゃんと防毒面や薄いゴムのかっぱというか防毒服を与えられていた。
- ・首からかける厚いズックで作った鞆があって、そのかばんの中に防毒面とか防毒服とか、それから消毒液とか、いろんなものが小さい袋に梱包されて入っていた。
- ・他の部隊は簡単な防毒面だけはみんな持っていたが、服までは持っていない。僕たちはもともと毒ガス部隊の兵隊だから、完全な物を与えられていた。
- ・むこうの兵力をだいたい想像してね、そして強いガスとか弱いガスを組み合わせていた。輜重兵はそういうガス器材を輸送するための部隊だったが、歩兵部隊とは一緒に

行動とってね、危険は歩兵さんと同じなの。一般地方の人はね、輜重兵は食料や弾の輸送で安全なんだから、戦争行ってもそんなに心配ないなんていう解釈が多かった時代だけだね、行ってみればさほどそうでない。うん。歩兵さんとおんなじ。危険な場所。

・(討伐でも毒ガスを)使ってね。長い戦闘でね、だんだん支那人の地方人の話を聞くと、最初毒ガス弾でわからなくて、「悪い流行の風邪がはやってきた」というふうに解釈していた。風に悪い空気が含まれていたから、くしゃみが出て済んだとかってそういうふうに解釈してたの。だけだね、だんだん日本軍が数多く使うようになる。したがってむこうでもね、だんだんわかってきてね、日本軍が使ってる毒ガスというもんだそうだっていうことになってね。

・「これからガスの準備をする」と言われると、輜重兵が積んでいたガス器材をね、歩兵の焚く陣地を構築した塹壕のそばまで運んでいくわけね。でそれを歩兵さんに渡して帰る。歩兵さんは危険なとこにいてね、それを時間がきたら焚くわけだよ。

・輜重隊は毒ガスを管理しながら輸送してたんだね。

・運搬には特殊ではないね、輜重隊が普段使ってる輜重車で運んでいた。それと鞍馬といってね、馬の背中に鞍をつけて、それに器材を結わえ付けていた。道路の弱いところはほとんど馬の背中を利用したわけだ。

・軍馬は2歳になった男馬を軍の方で買い上げていた。北海道では新冠に軍馬育成所があった。

・毒ガスは最初は発煙筒だったが、だんだん砲弾化されて、大きい弾にして遠くへ飛ばすようになった。

・部隊では大砲は所有してない。別の兵科の砲兵が扱った。

・瓦斯は黄色とか、茶とかって色で区別するんだ。

・毒ガスの砲弾は別にもってない。ただそういう山砲隊などに守られて行動してたことは確かだね。そういう部隊も、各その司令部から命令で、この瓦斯13中隊をね、見守る行動をね、助けてやってくれていうふうに命令されるからね。

・砲兵部隊はどういう順序で弾を調達してもらってたか、みたこともないですよ、きいたこともないからわかんないけどね、

○1940(昭和15)年1月7日～1月29日、高城及萬家店付近の戦闘並びに京漢線(廣水－柳林)以東環水河谷の掃蕩戦。

・萬家店の戦闘でもガスを使った。

・その時、同じ輜重兵の須田という一等兵が亡くなってる。この人はね、かわいそうだったんだよね、小休止してね、行軍の時に15分間休憩時間あんのね。その時にね、休むんでね、俺が腰を下ろそうとしたところへね、「ああそうだ、馬がいるんだから馬に食べ

させる草が生えてるところ行ったほうがいいなあ」と思って、そこをよけてね、草のあるところへいったらね、そしたらその須田という一等兵がね、「咲間、お前のあと俺もらってもいいか？」っていうから、「いいよ俺あの、馬に草食べさせるためにそこよけたんだから」つつたらね、そしたら、「ありがとう！」ってそこへ腰かけて、まもなくねえ、どっからか飛んで来た一発の弾に、頭貫通してね、亡くなっちゃった。だからみんなね、戦争なんつうの、どこでどうなっかわかんないもんだなあつつてね、びっくりした。

・(萬家店の戦闘でも)何人が戦死してるね。帰ってから弔いをした記憶あるからね。

○1940(昭和15)年1月30日、信陽集結

○1940(昭和15)年2月5日 信陽出発

○1940(昭和15)年2月6日、武昌着

【※「戦史叢書」によると昭和14年12月から中国軍の冬季攻勢を受け第十一軍は緊急方面に戦車部隊、重砲部隊等を急派。信陽地区には昭和14年12月14日に第三師団が出撃。しかし12月下旬に至るも敵の攻撃は止まず、師団は1月5日から信陽北方に反撃作戦を行ったとされている。野戦瓦斯第13中隊もこの時に急派された?】



↑一ヶ月の冬季戦を終えて(武田平八郎さんのアルバムから)

○1940(昭和15)年4月16日～7月15日、宜昌作戦に参加。

・ほとんど歩きが多いのね。トラック部隊というのもあったけどね、それは部隊がもう全然別個でね。だから行くにも帰りにもね、歩くのがもう行動だったね。行く時は元気があったけどね、帰りはもう痩せてしまってるからね、帰りほどつらい目にあったことない。そうしてね、食料もね、弾が飛んでくるところへ入ってね、ここから戦場だという時にね、「現地調達をしてよろしい」という上からの命令が来るのね。そうすると中国人が飼ってる豚をとって食べたりした。

・補給は後方からあるけどね、十分にこないですよ。敵もね、日本軍の食料や弾を輸送するね、輜重部隊というのは戦備が弱いからね、あれを襲えばいいんだっていうわけで、それを狙って襲うもんだからね、しょっちゅうそういう部隊が全滅してね、私たちの前線に届く量が少ないんですよ。当時はね、日本から来る慰安文を読むとね、また勝ったまた勝ったってね、日本は毎晩のようにね、提灯行列で祝ってますなんて書いてあったけどね、あとで考えてみるとね、ありゃ軍部のね、おおげさなね、やりかただったなあと思う。

・昭和15年ごろに中国の兵隊は捕虜になるとね、「日本はね、今勝って威張ってるけどね、蒋介石はね、10年間長引かせたらね、日本は食料もね、兵器もね、補充できなくなってね、自滅するからそれまで我慢して戦おうというね、そういう命令のもとだよ」と言っていた。だから蒋介石のほうは長期作戦を考えてたんだよね。

・捕虜もそのころね、7日たったら生まれ変わるという迷信が強くてね、「殺してくれ」っていう者が多かった。中には日本のいうこと聞くからね、日本の兵隊の中に、一緒になってさ、荷物背負ったりなんかしてさ、手伝って歩いてたのいたけどね。

・飛行機が駐屯地の上から物資を落としてくれることがあった。部隊名が書かれていて、よその部隊の名前だと、それをいち早く盗んで帰るんですよ、上官の検査を受ける前にね帰ってしまえつつってね。だってそういうことでもしなかったらね、十分に食べらんないんだもん。海軍さんはね、食料がよかったね。

・中国には焼酎という高粱をもとにして作った強い酒がある。それを飲むとすーっとして、眠気覚ましにいいということで、よく水筒にいれて持って歩いた。

・虱がシャツの縫い目にたくさんついた。それでもね、洗濯する時間がないからね、小休止の時間にね、夜ね、昼でも、一般地方民がねどっか引き上げて行って、いなくなった空家へ入り込んでね、そこで火を焚いてね、あぶり殺してね、そして着たもんだ。洗濯する間がないから。

・ハエと蚊が多くてね、ひどかったんだよ。当時の中国は衛生管理がわるかったからね、だからもうハエと蚊が蔓延しておって。

・暑いからね、夜も暑いしね、本当にきれいな水っていうのなかなか手に入らないんですよ、中国はね。それで死人がたくさん浮かんでるね、小川の水の飲むなっていわれた

時ね、武田君(※戦友)もあん時飲んだ一人じゃなかったか。そしてね、「いやいや下痢してよお」って、毎日衛生兵から薬をもらっていた、

・偉い人は馬に乗って歩く。で、馬に乗っていて疲れると、「当番兵お前乗れ」といって自分で歩くというような状態でね、体力を消耗しなかった。

・将校が部下を殴って謝らなかったら、こんどはその将校を「将校だと思ってね、いばりくさってるからね、あれね後ろ弾で殺してやろう」っていう者も出てくる。だから怖いんですよ、戦場は。敵の弾でばっかり死ぬとかぎったもんじゃないから。結局、自分のね、命をかけて戦ってるんだからね、階級がびりだからつつてね、殴ってね、自分の命令を果たそうなんていう上官は間違ってるんだよ。

・軍医さんは中隊に一人だけしかいなかったのが大事にされていた。その軍医さんがちょうど伊達の加藤医院という病院の甥っ子だったので、僕はその軍医さんにかわいがられてたなんていったら失礼なるけれども。当時、加藤医院は眼科の病院で、いとこが看護婦として働いていた。

・中隊には軍医さんが一人。あとは衛生兵下士官。やっぱり地方でいけばもう開業できるぐらいの資格を修得した人だと思うんだけどね、軍曹や曹長が軍医さんの手伝いをしていた。

○1940(昭和15)年7月11～31日、宜昌警備

・宜昌作戦でも毒ガスを使った。

・宜昌を占領した時に、警備部隊が来るまで警備しなさいという任務が出たもんだからね、あの、ガスで死んだね、兵隊が、一般民までね、揚子江に投げ落とすの大変だった。

・その時ね、山砲隊がね、【※毒ガス】持ってるということわかったのはね、私あの、中隊本部付きにおったからね、中隊の無線でね、第なんぼだったかな、番号忘たけどね、山砲隊と連絡をとりあって、一緒に毒ガスを使いなさいという命令が入って来たんでね。ああ山砲隊でもね、毒ガスもってるんだなあとわかったんだね。そのときも、本部からね、「咲間お前、この電話の秘密をね、他人に言っちゃだめだぞ」って、口止めされたけどね。

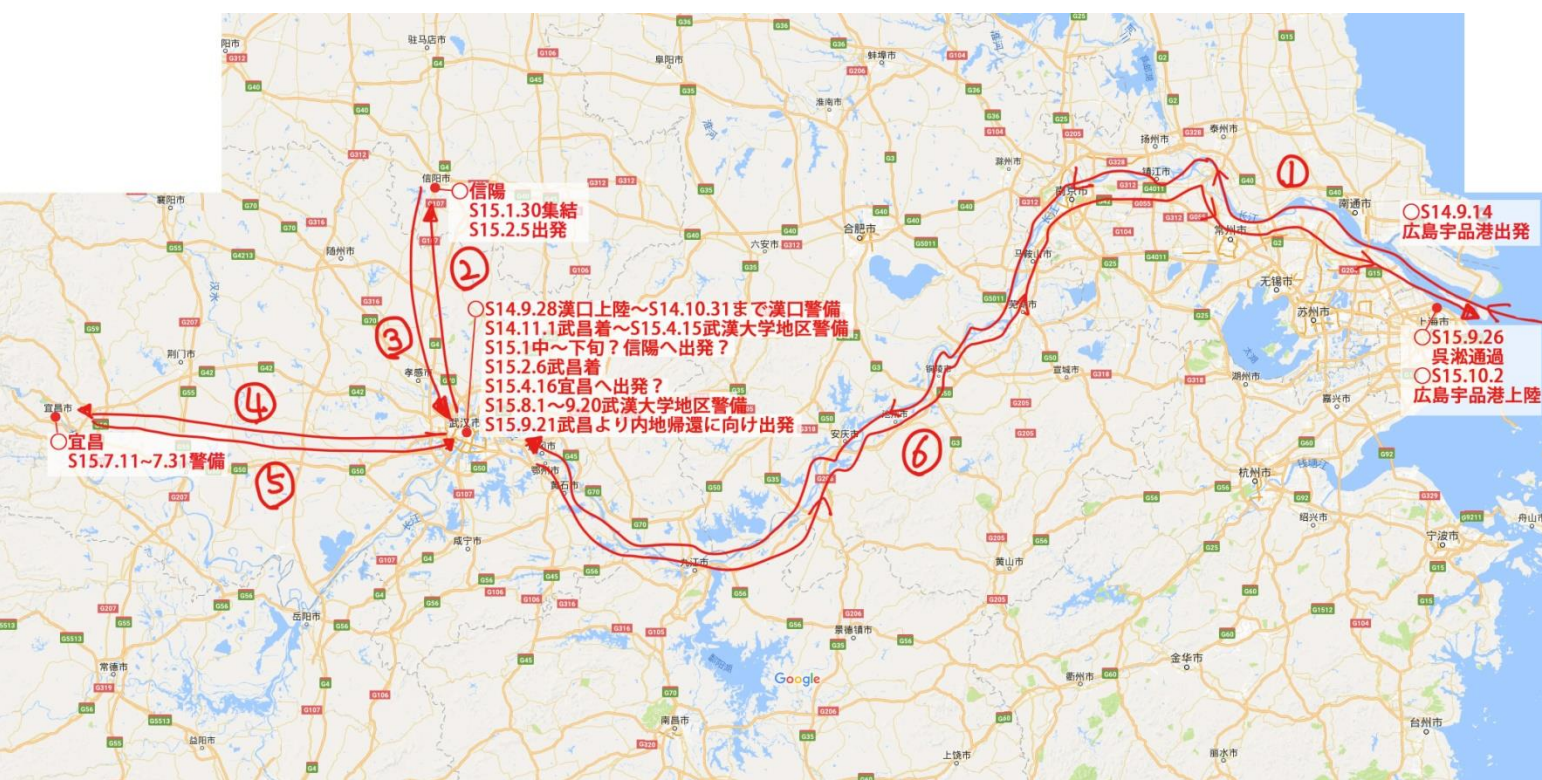
・戦後、戦友会で酒を飲んでいい機嫌になるとね、いろんな冗談話がでてね、「俺たち、揚子江へ流した支那人の魂の恨み残ってるよなあ」なんて言われてねえ、「俺達いい死に方しないわ」なんて冗談言ってたもんだ。

・(毒ガスを使うことについては)命令に従う、「仕方ないんだ」という気持ちが強かったね。「これは国際で禁じられてるんだ」っていうことはわかってたよね。

- 1940(昭和15)年8月19日、昭和15年陸支機密第148号第61次復員下令。
- 1940(昭和15)年9月21日、内地帰還の為、武昌出發。
- 1940(昭和15)年9月26日、ウースン港通過。
- 1940(昭和15)年10月2日、宇品港上陸。
- 1940(昭和15)年10月5日、旭川着、歩兵第27連隊留守隊に転属。
- 1940(昭和15)年10月8日、召集解除。

・同年兵19人のうち、記憶にある戦死者は二人だけ。あと大半の人は無事にかえって、戦友会で一緒になった。

・戦地から帰って来て在郷軍人会の会員になった。そこで「ああ君、毒ガス部隊だったのかあ、毒ガス部隊の働きは有名だったもんなあ」と言われたぐらい毒ガス部隊の存在は一般に知られていた。



↑ 武田平八郎さんの軍歴を元にした中国での行動図(作成:佐々木徹さん)

○1941(昭和16)年8月、応召。樺太へ。

- ・上敷香にいた。
- ・輜重兵の部隊だけどね、兵舎は山砲部隊の兵舎を借りていた。
- ・部隊は要2232部隊[※この番号の当該は歩兵第125連隊。しかし同連隊の樺太移駐は昭和20年4月なので、樺太混成旅団輜重隊のことか?]。
- ・樺太から帰ったのもね、あの、帳簿上は帰れる資格がなかったんだよね。それねえ、兵隊が嫌な中学校の先生で、どこも悪くないけど神経痛、神経痛だって、ここ痛い、足痛いっつってね、訓練にも出ない、勤務にも出ないという“西村たけお”という人がいた。
- ・その時の人事係の軍曹が、初年兵の時に世話になった伍長だった。その人がいろんな話からね、「字の上手な人を欲しいんだけどなあ、俺の助手になあ」というから、「こういうのいるよ」ったら、「じゃあそれ連れてきてくれ」っというからね、つれてったら、「ああ、こういう字書くんた。明日から俺んとこへこい」っつってね、そして“西村たけお”という上等兵をね、つれてったんだよね。したらその人がね、ずっと喜んでね、そこへ勤務で通うようになったしね。したら、あの一時ねえ、第一補充兵だけが召集解除になる予定のところへね、予備役兵っというのは俺一人がいたんだね。それをね、西村さんがね、わかってて書いたんだと思うんだ。それを間違えて見落とすなんてことないからね。あとで「見落としましたすみません」と人事係に詫びていたんだけどね。だけどね、やっこさん、俺がああいう勤務なくても済むところへ世話してやったから、そのお礼に俺の名前書いてくれたんだべと思ってね。「今回俺帰れるようになったよ、西村君」といったら、「ああよかったですね、先輩」と俺の手を握ってね、しばらくは離そうとしなかったからね、「ああ、そうなんだなあ。お礼の一端にこれがやってるんだなあ」と思った。

○1943(昭和18)年3月、召集解除。

- ・帰ってまもなく他に就職したり住所が変わった場合、いち早く札幌の動員部に連絡よこせという葉書もらった。そうしたらすぐ、3月に帰って8月に召集になった。

○1943(昭和18)年8月、二度目の応召。旭川の連隊に勤務。

- ・そのころは大半の男が召集になってしまっていた。
- ・補充兵で子供も奥さんもある人が不寝番になっちゃって、士官学校出て来た少尉や中尉あたりがね、不寝番のいろんな勤務状態の情報をいいなさいなんて質問してね、答弁に困っているのね。それをやめそうないからね、二人ぐらいで、「君一緒にいくべ、あの将校いじめてやるべ」といって、「なんで君の先輩にあたるものをね、そんなに殴る、いじめるんだ」、そして「お前出て行け」っつってね、おっつけられると、「わかりました帰り

ます」と言って帰っていくのが利口な将校でね、その反対だったらこんどは、「手伝ってくれ」と、2、3人味方呼んで来て、それで引っ張り出して行って、廊下の2階の窓から、雪が深いから骨折もしないから、「上手に立ってね、歩いて帰れよ」といって落とした。そうしていじめると、馬鹿な少尉あたりが連隊長に報告に行く。すると連隊長は次の朝に「誰それ、誰それ、ちょっときてくれ」と当番の兵隊を使って呼びにくるから行くと、「この週番将校を二階の窓から落としたの君たちか」というから、「そうだよ」と言ったら、「あんまりいじめるな」と言われた。それで、「鉄砲弾の中で飯食ってからね、出直して来い」って帰してやったんだ。「階級下の者にいじめられたなんて、そんなの将校にならないよ」と言ってやった。

- ・一回戦地に行って帰って来たものは階級に関係なく強かった。
- ・階級は兵長だった。下士官への進級は辞退した。「どうして辞退するんだ」と言われたので、「同じ日本人がね、日本人にね、お前この任務を死をもって実行しなさいというね、そんな命令下す立場に立ちたくないからだ」と言ったら、「お前それまではっきりいうんならね、もうちょっとで非国民だぞ。きわどいとこまでいうなあ」と言われた。
- ・「どこに3週間だけの教育でね、戦地送られて、ちょっと成績よかったからって上等兵で帰って来てね、こんどすぐ予備役で召集になってね、すぐさまこんどは兵長になったりしてね。満足な教育も受けてないのにね、同年兵でね、ずーっと日本から離れたことのない同年兵がね、同じ近所の者でね、優秀なのね、まだ一等兵で、兵舎の中で寝転んでね、雑誌読んだりなんかして、神経痛だといって勤務もなにもさぼってるんじゃないか」と、「そんなのいるか」っていうから、「あらかわのぼるっていうのは、俺とおなじ同年兵で同じ兵科なんだ。あれ近所の三男坊だよ」と言ったら、「ああそうか」、そして「なに、軍曹殿。あんたもね、教育悪いからね、ああいうのが出たんだと思うよ」と言ったら、「お前きついこと言うようになったなあ」、「いやあ鉄砲弾の中で飯くったからさあ」。

○1945(昭和20)年6月13日、召集解除。除隊。

○1945(昭和20)年6月下旬、三度目の応召。北部30111部隊【※札幌地区第七特設警備隊の通称】へ。

- ・終戦の時は札幌に本部があった本土決戦部隊の北部30111部隊に召集された。
- ・召集令状には「服もなにも全部私服で、そして飯を食う茶碗も箸も持参しなさい」という内容の説明がついていたので、「何事だ」と役場の兵事係に怒鳴り込んでやったら、「ちょっとこっちそんなところでねえ、つつ立って話たって駄目だから、俺んとこへこい」と兵隊係が言うから行ったらね、「うん、大きい声でいえないけど、場合によっては日本は負けそうだよっていうわけだね、うん、それでこんどの召集令状なんだ」と言われた。
- ・部隊は虻田町(現在は洞爺湖町)の中学校を兵舎にしていた。ちょうど虻田の町長さんが伊達市出身の人だったので、その人がいろいろ食糧など、「足りない分はうちの役

場のほうで補助してあげますから」と言って協力してくれたのでよかった。

・そして虻田の中学校で、編成部隊が出来た。

○東京の中野学校から教官が来る。

・終戦近くなので結局本土決戦の戦法などを習った。

・本土決戦ということになったらみんなも「場合によっては日本負けるんでないか」という噂話を陰でしていた。だから「本土決戦するなんていう馬鹿な事考えないで、今のうち降参したほうがいいべなあ」という兵隊もたくさんいた。

・教練よりも朝から晩まで「黒板に書くことをノートにうつしなさい」と命令されて書き写したりした。

・習ったことは、例えば「今、日本の大きい港の外へ敵の軍艦が停泊して様子を見て侵入してきている。それを沈めてこいとお前達命令を受けたらどうするか？」という問題が出る。すると「弾薬をもって泳いでいってその弾薬を船にくっつけてもどってきます」という答えが大半だった。そうしたら教官が怒って「馬鹿な事考えるな。そのへんから長い竹の棒を探してきて、その節を抜いて、それで呼吸しながら海底を歩いていくんだ」と言った。そうしたら戦地から帰った人が多かったもんだから、くすくす笑いながら、「なにあの教官威張って言ってるんだ、竹なんてもの長さの程度あるべや、そんなもんで呼吸していけて言うけれども自分が死んでしまうべ」。それで教官に「なんでおかしくて笑ってるんだ」と聞かれたので「教官の言うことがおかしいから笑ってるんだ」といったら「そんなに俺変なこと言ったか」と言われた。

○1945(昭和20)年8月15日、終戦。

・終戦の天皇陛下の放送は虻田町の中学校で聞いた。

・天皇陛下の放送聞いた時ね、「やっぱりね、日本は国が小さかったんだなあ」と思ったですね。うん、結局ね、軍部のね、あの、圧力と言うかね、力がね、強すぎたんだということね。なぜ天皇陛下の言うことね守んなかったんだべなというのを感じたのがね、戦争終わってから何年もたってから文藝春秋に発表になった天皇陛下の日記を買って読んでからだわね。それ読むとね、天皇陛下はもう最初からね、戦争は避けなさい、避けなさいというね、それ一方の、考えだったんだわね。だから当時の、陸軍大臣だった総理大臣だった、東条英機と言う人の、意見はね、相当強かったんだね。

・戦後は農業を続けた。

●最終階級：陸軍兵長

□参考文献など

- ・同年兵武田平八郎さんの軍歴表
- ・戦史叢書「支那事変陸軍作戦(3)昭和16年12月まで
- ・「JACAR(アジア歴史資料センター) Ref.C11112053500、呂集団(11A)作命綴 2/2 昭和14年4月23日～14年12月7日(防衛省防衛研究所)」
- ・「JACAR(アジア歴史資料センター) Ref.C15011255800、「昭和20年10月下旬「マ」司令部提出 帝国陸軍部隊調査表 集成表(原簿)List5 日本陸軍省」(防衛省防衛研究所)」
- ・「となりの人からきいたこと そして私が思うこと」※咲間さんの手記を掲載
<http://sakuma.press328.com/>

#####